《書評》

山本昭宏『教養としての戦後〈平和論〉』
（イースト・プレス，2016 年）

宮　下　祥　子

1　本書の構成と内容

『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960 ──「被爆の記憶」と「原子力の夢」』（人文書院，2012 年），『核と日本人── ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』（中央公論新社，2015 年）を上梓し，精力的な執筆活動を続けている歴史社会学者の，3 冊目の著作である。「平和」という言葉の意味内容はあいまいで，「この言葉を使用する人びとが自らの思想信条や願望を投影させてしまうため，何が「平和」なのかという問いについて，皆が一致する答えは簡単には得られない」〔5 頁〕。しかし「「なんとなく良い言葉」であるだけに，ブラックホールのようにあらゆる論点を吸収し，結果的に議論を停止させてしまう」という性質をもつがゆえに，「戦後日本は一貫して「平和」という言葉で自らを規定することができた」〔同〕。そこから本書では，戦後日本で「平和」という言葉がもった意味が，時期ごとに多角的に検証されていく。対象となるのは，論壇の言説や文学からポピュラー文化まで，多岐にわたる。

一般読者向けの平易な叙述が意識されており，「はじめに」では前提知識として，1955 年以降に定着した「保守と革新」の対立軸 ── 現実主義に基づき「平和」を「安全保障」の問題として語り，時に改憲を主張する保守派と，再軍備を否定し憲法を守ろうとする革新派，というねじれの構図 ── が説明される。その上で，本書が叙述の念頭に置くのは「理念としての憲法」「戦争の記憶」「生活保守主義」の三点であるとする。章構成は以下のとおりである。

はじめに
第一章　「平和」と独立　敗戦・占領から六〇年安保まで

第二章　「平和」の分離　一九六〇年～七三年
第三章　「平和」の安寧　一九七三年～八九年
第四章　「平和」の消失　一九八九年～
おわりに

第一章では，占領下における人々の戦争への強い拒否感が憲法第9条の支持母胎となったこと，しかし再軍備と講和によって改憲論が登場し，日米安全保障条約が「平和」をめぐる議論を鋭く対立させたことが述べられる。第二章では，「現実主義」と呼ばれる保守系の政治学者たちが日米安保体制を是認する文脈で「平和」の語を用い，自民党政権もそれを踏襲していくことで，結果的に「平和」の語が「体制化」する時期として1960年代を描く。同時に，若い世代を中心に，戦後日本の「平和」への批判が提起されるようになったことも指摘される。第三章では，高度経済成長が終焉し経済的な豊かさを達成した日本で，憲法第9条と日米安保条約の組み合わせによる「平和」が定着し国民がその保守を志向するとともに，その「平和」は社会に弛緩をもたらす「元凶」であるという言説も登場することが述べられる。最後に第四章では，冷戦終結によって保革の対立構造が崩れゆくなかで，個人と社会をつなぐパイプが痩せ細り，インターネットの普及などによる言論の場の再編成も始まり，「平和」の像が共有されにくくなって現在に至ることが示される。

以上の見取り図に，膨大な言説や作品が配置されており，その量は読み手を圧倒させる。

2　到達点

まず本書で重要なのは，「平和」概念のあいまいさを明確に示し，その上で今日「戦争の記憶は色あせても，「戦争＝国家間の総力戦」という戦争観は強固に残存し続けて」おり，「日本社会の戦争観はアジア・太平洋戦争的な「総力戦」に規定されている部分がある」ことを指摘した〔12頁〕点であろう。今日まで続くこの戦争観は裏を返せば，過酷な労働を「自己責任」の名のもとに放置しておきながらも依然として日本は戦争のない「平和」な国であるという，あいまいではあるが社会批判の余地を骨抜きにする通念の基盤ともなっている。

それでも人々の「平和」観は，近年変わりつつあるという。冷戦終結から現在までが

描かれる第四章では，ポピュラー文化に投射された「平和」観の変化への洞察に，前著でもうかがわれた著者のセンスが，遺憾なく発揮されている。歴史研究者が敬遠しがちな「現在」の歴史的位相に切り込み，その描出に成功していることは，本書の最もすぐれた点であろう。対象は，アニメ映画版／テレビドラマ版『火垂るの墓』から，小林よしのりの『新・ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論』などにも及んでいる。前者については，1980 年代に制作されたアニメ映画では焦点を死にゆく主人公の兄妹「二人だけの話に収斂させてしまった」ものの，2005 年のテレビドラマ版では，アニメ映画で悪役として描かれる「おばさん」の苦悩を前景化することにより，「銃後生活における他者の切り捨てという問題に踏み込ん」でいるという〔199 頁〕。そしてその背景として，2000 年代に「若者たちの生活苦や社会的孤立を中心に，「貧困」が社会問題化していた」ことを挙げ〔同〕，「平和」観の変化をあぶり出している。後者については，小林の歴史認識の問題性を指摘する言説は多数存在するが，なぜそうした問題を孕む彼の作品が 1990 年代という時期に一定のポピュラリティを獲得し得たのか，そのことを社会史のなかに位置づけて理解する努力こそ求められている。著者は，小林が作品中で試みたのは「あくまで日本人としての「歴史感覚」を再構築しようとした」ことだったと述べ，それが要請される社会的背景として，「個人が社会のなかに自己をうまく位置づけられず，生きる目的や目標を見出すのが困難な状況」を看取している〔190 頁〕。小林の人気は，まさに今日も続くいわゆる「心の時代」── 社会問題をも個人の「心」の問題に還元する発想や態度が広く行き渡った時代 ── の困難を鏡映しにする現象であるという著者の認識は，的確である。宇野重規（政治学），北田暁大（社会学），斎藤環（精神医学）らをはじめとする隣接諸分野の専門家による現状診断を，うまく同時代の歴史叙述に反映させている点は，本書の到達点である。

また本書全体を通して，とくに第二章において，高坂正堯，永井陽之助といった保守系とされる「現実主義」者の「平和」論を俎上に載せている点に，今後の可能性をみる。従来あまり横断的に論じられることのなかった〈保守／革新〉〈右／左〉双方の相違点と共通基盤とを再検討に付す試みは，日本の「戦後」が拠って立つ足場を問い返すための基礎作業として，今後さらに進めていく必要があるだろう。そもそも保革の対立構造とは，実際のところ何であったのか。保守の側の「革新」像，革新の側の「保守」像が相互に硬直的なものであったことが，認識の次元で過度に対立軸を構築し，議論を成立させる余地を奪ってきた側面はなかったか。これは戦後史を捉え直すパースペクティブであると同時に，すぐれて今日の憲法改正などをめぐる時事的な議論の問題性を

浮かび上がらせる，アクチュアルな論点でもある。

3　疑問点

本書は一般読者に向けて書かれている。その一般読者とは，具体的には誰か。

本書冒頭において，「誰も「平和」を否定しないが，口にするとなんとなく空虚な感じが残る。「平和」は，そういう言葉になっているのではないか」と述べられている〔3頁〕。この前提は，「平和」を「空虚」だと感じていない読者にとっては，おそらく受け入れがたいものだろう。逆に，「平和」を「空虚」だと感じている者は，どういった動機で本書を手に取るだろうか。

かつて「「平和」が熱かった時代」があった〔218頁〕。敗戦直後のその「熱さ」はしかし，本書で十分に提示されているとは言いがたい。「平和」という言葉がもつ重みやリアリティには，敗戦直後と現在とで絶大な開きがあるのだという事実がまずもって力説されなければ，読者は「空虚」な言葉の歴史を描いた本に，どのような興味をもち得るだろうか。第四章では充実した分析の対象となっているポピュラー文化は，肝心の第一章にはほとんど登場しない。一般読者に最も馴染み深いであろうポピュラー文化や，大衆社会化以前の民衆運動であるサークル文化運動において「平和」がいかに語られていたかを，それが一番「熱かった時代」について示すことに成功していたならば，後の章を読み進める読者の関心を，より喚起し得たと思われる。

さらに一般向けであるならば，「論壇」を対象とすることの理由が，そもそも「論壇」とは何かという前提知識も含め，懇切丁寧に説かれる必要があるだろう。「論壇」と聞いてピンとくる一般読者は，とくに「平和」を「空虚」だと感じている若年世代には，少ないのではないか。多数の論壇人の「平和」をめぐる言説が列挙されるが，彼らの思想形成やライフコースも示されないため，知識のない読者には取っかかりがなく，読み進めるのに困難を伴うことが予測される。先述の高坂や永井などについても，彼らが従来あまり戦後史という枠組みのなかで詳細に論じられることのなかった保守系の論客であり，だからこそ再検討が意義をもつことは，とくべつ注意が促されない限り，一般読者には伝わりにくい。

加えて，論壇人を分析対象とすることについては，評者は次のような疑問も抱く。本書は「生活保守主義」を叙述の軸のひとつに据えているが，「生活保守主義」と「論壇」とは，そもそも親和性が低いのではないか。論壇人とは，あるいは知識人や思想家

とは，（「理想主義」的なものも含む）イデオロギーや独創的な思想や研究成果・作品を公にし，ときに議論をたたかわせることを生業として生活を保守している一群の人々であろう。また政治家や政治学者，憲法学者とは，広義には，国家や国民の安全保障（あるいはそのための議論）を担うことによって生活を保守している一群の人々でもあろう。したがって彼らの「生活保守主義」は，それ以外の大多数の「一般」の人々の「生活保守主義」とは，弁別して考えるべきではないか。

むろん「生活保守主義」を否定的なものと捉えず，「おそらく誰もが持つであろう，自分の生活を平穏無事なものとして守り保ちたいという心情」〔13 頁〕として極力価値中立的に考え直そうとする著者の姿勢自体は，生活を保守することさえままならなくなりつつあることが広範に意識される現在の反映でもあるだろうし，それはそれとして重要な視座である。ちなみにそうした姿勢は暗に，従来の革新派の「理想主義」に対する，近年広がっている不満や反発やシニシズムへの，著者のシンパシーを表しているのかもしれない。

また，戦後史を通史的に描く際にとりわけ焦点となるのは，60 年安保や 68 年前後の学生運動，またベ平連をめぐる評価であるが，それらに関して本書では，従来の説に依拠するかあるいは社会通念をなぞっている叙述と読める箇所があるものの，著者自身の総体的な把握が判然としない。そのこととも関連して，アジア・太平洋戦争における加害の自覚は，やはり日本の戦後史において，潜在的であれ顕在的であれ常に，一国的な「平和」を内側から問い返す重要な契機であり続けたはずである。それを一切省いた「平和」論では，どこか肝心なところを掬い取れないように感じられる。

総じて本書は膨大な言説や作品を意欲的に盛り込むあまり，話の焦点が拡散しがちである。また，あいまいな「平和」の語で表象されたものの内実に迫ろうとする志とは裏腹に，時折本書でも，「平和＝国家間の総力戦がない状態」という意味において「平和」の語が用いられていることが気にかかる。たとえば保守系の論壇人による「平和」論に対象を絞れば，あるいはポピュラー文化にみられる「平和」観を叙述の主軸に据えれば，より読者の関心を惹きつけ得たように思われる。一般読者に届く本を書くことが，時に高度な専門書を書くことに増して難易度の高い仕事であることが思い知らされる。

4　「平和」=「空虚」，という本書の前提について

改めて，いま誰にとって，「平和」が「空虚」で，「口にするのが恥ずかしい」言葉〔17頁〕なのだろうか。為政者の場当たり的なレトリックとして「平和」の語は濫用されるが，一方で戦争体験者や反権力の運動を担う人々の多くは，いまも充実した願いを込めて「平和」を口にしているのではないか。2015年夏の安保法案反対運動などではとりわけ，「平和」の語は，各所で多用されていたように思う。

ある言葉を「空虚」だと感じるか否かは，究極には個人の主観の問題である。同時に，「平和」を主張することに熱意をもつ個人の主観も，誰しも否定することはできない。その意味で，本書の前提となっている「平和」=「空虚」論には，繰り返しになるが問題が含まれているように思う。

とはいえ，言うまでもないことだが，個人の主観は当該の社会や時代状況の拘束を受ける。いま「平和」が「空虚」に響くという一般化は，その対象をとくに「あの戦争」への距離が遠い若年世代に限定するのであれば，ある程度は許容されるようにも思われる。

1984年生まれの著者は，たとえば「いま私にとって，「平和」とは，空虚で口にするのが恥ずかしい言葉である」と，まず著者自身の主観を提示することから，本書の筆を起こすこともできたのではないか。そしてそれは意味のあることだと，評者は個人的には考える。評者は著者と同世代に属する者だが，評者自身の主観は，著者の主観と重なるところがある。著者の「平和」の語に対する「空虚」感の淵源は，著者が学校で受けてきた「平和教育」にあるようだが〔218頁，および前掲『核エネルギー言説の戦後史1945-1960』312頁〕，このことにも，評者は同感である。「平和」を「分析したり論じたりするのではなく，祈ったり願ったりする」〔218頁〕だけの空疎な「平和教育」（=情操教育）に対する疑問は，若手による「戦後」の問い直しの，ひとつの駆動因でもあるのかもしれない。

かつて，エリートの若者が年長世代を突き上げていた時代があった。彼らは社会変革を志し議論をたたかわせ，年長者を告発すると同時に，友人に「自己批判」を要求したりもした。いま，そうした光景に出会うことはほとんどない。若者は，エリートもノンエリートも，（ウェブ上でのバッシングやヘイトスピーチなどの例外を除き）おおむね調和や無難をよしとする空気を生きている。求められるのは「自己肯定」である。たかだか半世紀ほどのあいだに，若者の常識は，この点ドラスティックな変化を遂げたよう

だ。

その間生みだされた膨大な若者論については詳らかにしないが，ともあれ，「戦後（民主主義）」を唾棄すべき旧弊と捉え「改革」の対象に据える為政者を少なくない若者が支持している現実を読み解く意志や観察眼を，いま年長者の，果たしてどのくらいが有しているか。

調和や無難をよしとする同調圧力をくぐり抜けてきた評者は，この社会をつくり上げてきた年長者を，表立って告発しようという発想をもちにくい。そのことはある程度，本書の著者にも共通していよう。しかし告発とは戦後を通じて，社会変革のためのコミュニケーションの一形態であったと考えるならば（そこには数多のディスコミュニケーションが存在しただろうが），現在を特徴づけるのは，コミュニケーションの不在ではないか。「平和」を熱く唱える年長世代と，それによってますます「平和」を「空虚」に感じつつ自閉する若年世代との，率直なコミュニケーションの徹底した不在。さしあたり，その立脚点のズレを明示することが必要ではないかと評者は考えるが，それが可能なのは，戦後史研究を担う若手でもあるように思う。

著者は本書「おわりに」で，「対話を通してしか，自らの思い込みや偏見を解きほぐすことはできない。自分なりの「平和」概念を磨くことで，他者との共通点を自覚し合うような試みが，少しでも活性化してほしい」と述べる〔219-220 頁〕。「対話」は「他者との共通点」のみならず，他者との相違点をも自覚させ，そのことによって新たな公共性を模索する出発点となるものであろう。世代内／世代間の「対話」に向けて（後者は著者の意図するところではないかもしれないが），本書の立脚する前提や問題提起が，広く検討されることを願う。

同時に，研究者，すなわち日常的にものを考え議論を行う（「対話」する）ことによって生活を保守している一群の人々が，そうでない大多数の人々に ── とりわけ，「生活を守ることは個人の「自己責任」となり，人びとが政治問題で「つながる」基盤も，弱体化」し〔17 頁〕，「個人が社会のなかに自己をうまく位置づけられず，生きる目的や目標を見出すのが困難な状況」にあり〔190 頁〕，「「心理学化する社会」のなかで本来ならば社会問題として広く議論されるべき問題を個人が抱え込んでしまい」〔192 頁〕，「バイトが忙しく，学業どころではない。就職活動は厳しいが，ようやく社員になってもやりがいは見出しがたく，下手をすれば「ブラック企業」につぶされる。排外主義が横行し，同調圧力のなかで「空気を読んで」生きねばならない。そして気が付けば「一億総活躍社会」の駒として動員される」〔211-212 頁〕，といった社会を生きる若

者たちに ──，いかに「対話」や「教養」を求め，その回路を開いていくことができるのか。人文・社会科学の危機のさなかにあってその困難性を自問しつつ，研究を続けたい。本書を読み，そのようなことを考えた。